その19　五兵衛　―ごへえ―

（平成28年11月１日号－第305号）

江戸時代、淀川沿岸の村々では、堤防の防備や樋門の開閉をめぐる抗争がたびたび発生しました。五兵衛は、こうした抗争の犠牲者です。

淀川の川床が次第に高くなったため、淀川沿いの村々では、かんがい後に不要となった悪水[あくすい]を自村内で淀川に排水できず、下流に位置する村から排水せざるを得なくなりました。伊加賀・三矢・泥町[どろまち]・出口・走谷・中振の上庄[かみしょう]６カ村は、中振村と木屋[こや]村（現在の寝屋川市）の村境である赤井堤防に樋門を設け、赤井川を経て悪水を淀川に放流していました。

淀川（写真手前）へと続く赤井堤防の面影がかすかに残る本市と寝屋川市の市境となる道路（写真中央）

上庄の村々は、排水強化のため、樋門の拡張を幕府に訴えましたが、下流の村々は、排水による水害の発生を懸念して反対し、両者は対立していました。そのため、大雨が降ると、上庄の村々は、樋門が十分に開けられているかを見張り、下流の村々は、樋門や堤防を見て回り、壊れたところがないか、壊されはしないかと神経をとがらせていました。

文化４年（１８０７）５月下旬から降り続いた雨は、濁流となってあふれ、６月３日、伊加賀村の五兵衛らが樋門の番をしていたとき、ついに赤井堤防が決壊し、水が下流に押し寄せました。五兵衛らが堤防を壊したと思い込んだ下流側の人々が襲来し、逃げ遅れた五兵衛に暴行を加え、それがもとで数日後に五兵衛は亡くなってしまいました。

文政３年（１８２０）５月の大雨の後にも争論がありましたが、赤井堤防に新たな樋門を設けることで決着しました。この樋門は、先に犠牲となった五兵衛の名前を取り、「五兵衛樋[ひ]」と呼ばれるようになりました。